



Title	大島本源氏物語の本文：『源氏物語大成』底本の問題点
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1988, 3, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67249
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大島本源氏物語の本文

『源氏物語大成』底本の問題点

伊井 春樹

一 大島本源氏物語の意義

鎌倉中期に藤原定家によって校訂された源氏物語の青表紙本が、室町中期以降流布本となり、今日まで不動の地位を占めているのは異論の無いところで、今後もよほど素性の明らかな揃いの古写本が出現しない限りは、この状態が続くはずである。

とりわけ現代の研究においては、池田亀鑑博士による『校異源氏物語』（昭和十七年刊）と、『源氏物語大成』（昭和二十八年―三十一年）の出現による影響が大きく、ここで底本に青表紙本が用いられたことは、その後のテキストの方向をほぼ決めてしまった感がある。池田博士による膨大な量の諸本調査（冊数にして一万五千冊という）と、多数の協力者、それに出版者との共同によって完成された『校異』ないし『大成』は、源氏物語の本文研究においては空前絶後と言ってもよく、以後それを陵駕する諸本の系統論や本文研究はなく、将来も容易なことではないであろう。

池田博士が用いた青表紙本は大島本（現在は古代学協会蔵）

で、世間に一般に知られるようになったのは昭和五、六年頃という。大正十二年三月に芳賀博士記念会が発足し、池田博士を中心に源氏物語の古注釈を含めた注釈作業が始められるが、本文研究の方が重要と、途中から方針が変更された。昭和六年には『校異源氏物語』の前身となる校本の第一次稿が、翌七年にはほぼ完成していたとされる。ところが、その底本に用いられていたのは河内本であった。河内本を中心とし、青表紙本と別本による校異が付されるという体裁だったのである。その校本の完成とほぼ時期を同じくして大島本が佐渡から出現したわけで、すぐれた本文と知った池田博士は、急遽底本の変更を決断し、十年後になってやっと『校異源氏物語』ができあがるにいたったのである。研究者の良心といってもよく、それはまた本文研究にかけた池田博士の執念でもあった。このようにして、多分に偶然性にもよるのだが、大島本が青表紙本のオーソドックスな本文としての価値も持つにいたったのである。ただ、当初の作業のまま底本が河内本であったとすると、その後源氏物語の本文はどのような展開になっていたのだろうか、時に不

思議な因縁も思わずにはいられない。

このようないきさつによって、大島本が『源氏物語大成』の底本となつて以降現代までの、古典全書（朝日新聞社）・『源氏物語全釈』（松尾聡）・『源氏物語評釈』（玉上琢彌）・古典全集（小学館）・古典集成（新潮社）といった主な注釈書は、いずれもそれを継承しており、すぐれた本文であることは勿論ながら、今さらながら『大成』の存在の大きさも思う次第である。ただ、古典全書以下の本文は注釈書用に手を加えたり、他本で校合した校訂本文となっており、そこから大島本の復元は不可能で、その忠実な翻刻は『大成』だけというのが現状である。そのため、より正確と思われる青表紙本の本文を引用するとなると、今のところは『大成』の本文をそのまま借りるしか方途はない。

大島本の伝来等については別に述べるつもりだが、現在の姿は大内政弘の求めによって飛鳥井雅康が文明十三年（一四八一）に全巻を書写し、その後吉見正頼に伝えられ、そこで桐壺と夢浮橋巻は道増・道澄の書写本で差し替えられるとともに、兼良筆良鎮本で注記や本文の書き入れ・校合が全面的になされることになる。正頼は、同じく政弘を通じて良鎮旧蔵本を手に入れ、その行間・余白等の注記を、いわゆる大島本に転記していった。その折、良鎮本以外の伝本も用いたと思われるが、本文の校訂もしているのである。このように、大島本は雅康筆とはいえ、正頼によって手の加えられた本文であるという性格を、まず見

きわめておく必要があろう。

大島本が『校異源氏物語』『源氏物語大成』の底本に採用され、『本文ハ誤謬ト認メラルモノニ至ルマデ、スベテ原本ノママトシタ』（同「凡例」）とする唯一の翻刻文として、今日も広く用いられていることは喋々するまでもなからう。このような長大な作品になると、「スベテ原本ノママ」とはいえ、ある程度のミスは不可避ではあろうが、ただほ忠実な青表紙本として人々が用いている現状からは、一文字であっても誤りが存しては困るのである。大成本が出現して以降大島本の研究はほとんどなされず、複製本も出されていないため、現状では翻刻本文がなかば無批判に継承されてきた嫌いがある。本稿では源氏物語本文研究の一環として、たまたま大島本を調査する機会を得たので、大成本の誤植等を中心に指摘しておきたい。大島本に見られる、ミセケチや異本の書き入れ、校合の問題点、さらに雅康が初めに依拠した本文の性格等については別の機会に考察したい。

二 『源氏物語大成』の誤植

大島本（浮舟巻を欠く五十三帖）が『源氏物語大成』の底本となっているのは四十七帖、省略した六帖の理由は、花散里・柏木・早蕨には原本である定家筆本が別に伝来し、桐壺・夢浮

橋はすでに述べた道増・道澄による後の補写であり、初音は別本の本文のためである。以下、巻別に列挙していくが、大成本における誤読は勿論のこと、単純な誤植とか、仮名遣いにいたるまで指摘しておくことにする。上段に『大成』の本文と頁・行数、下段には大島本の該当する部分だけを引用し、その丁数を示した。

(帯木)

一 さるへきこと、おほえて(四〇四)―さるへきこととおほえて(八ウ)

「校異」にも、別本の項に「さるへきこと、おほえて」とするので、そのように読んだようだが、大島本は明らかに「さるへき」とする。明融本は「さるへき事」とあるので、大島本の誤写であろう。なお、大成本の「こと」とするオドリ字は、大島本では「こと」とある。

(夕顔)

二 らうのかたへおはするに(一一〇二)―おわするに(一四オ)
三 つといたきてああ君いきいて給へ(一二五六)―あか君(三三オ)
四 ふともゝのものはれ給はす(一二七六)―ふともゝのいはれ給はす(三六オ)
五 けさはたに、おち入あとなん(一二一一)―おち入ぬとなん(四一ウ)

二は「は」と「わ」の違いで、大成本の方が正しいものの、大島本とは異なる。三「ああ君」、五「おち入あ」はたんなる誤植で、校異では正しい語句となっている。しかし、巻末の「補正」には指摘されていない。四は大島本の「もの言はれたまはず」が、大成本では「ものも言はれたまはず」と「も」が補われる。校異でも「ふともゝのも」とするので、大島本の本文としていたようだが、どうしてこのような誤りが生じたのかは不明。『評釈』では「『も』は感動強意の助詞」と説明し、小学館版でも「も」を継承するものの、新潮版は原本の大島本と一致しており、「も」を持たない。これなども、大成本の誤りが後世の本文や注釈にまで影響してしまった例であろう。

(若紫)

六 うけ給はへるものを(一六五六)―うけ給はるものを(一九ウ)
七 ことさとおさなくかきなし給へるも(一七九八)―おさなくかきなし(三八オ)
八 荒ましう(一八三七)―あらましう(四三オ)
九 風ふきあるるに(一八三十四)―あるゝに(四三ウ)
一〇 まるきつるそ(一九〇三)―まいりきつるそ(五一ウ)
六の「うけ給はる」を、大成本では「うけ給はべる」と誤る。小学館版・新潮版では大島本と一致するが、『評釈』では「底本『うけ給はへる』活用語尾『はり』脱」として「うけたまは

りはべる」と本文を校訂する。『評釈』での「底本」というのは、大島本ではなく誤読した大成本を指すのであろうか。もしそうだとすると、大成本で誤って「へ」を入れたため、『評釈』ではさらに誤って「はり」の脱としたことになる。七の「おさなく」は、大島本では明らかに「おさな／＼」と「く」ではなくオドリ字である。いずれの注釈書も「く」とする。「おさなく」でも意味が通じはするものの、「おさなおさな」の方がいかにもあどけなさの残る表現ではないだろうか。八は、大島本の「あらましろ」の傍注に「荒」と記されているのを、大成本では目移りによって底本ではなく漢字の方を本文に採用したのであろう。九はオドリ字を仮名に直し、一〇は底本の「い」を正しい「ゐ」に訂正した例。これなど、「ゐ」が正しくとも原本通りに「い」とすべきで、校訂者がうっかり慣れた歴史的仮名遣いに翻字してしまったのであろう。

(末摘花)

- 一一 いまはぬさちはくる人も(二一〇九)ーあさち(二ウ)
- 一二 からうしてわな、かしいてたり(二二九四)ーかしうして(三六オ)

一一は「ぬ」と「あ」の誤植。一二は、大島本では「かしうして」とし、二文字目の「し」の傍らに「らい」と記す。異本との校合で、大成本では校異においても大島本の各所に見られる「イ」とする本文は取り上げていない。ところが、大成本の

校異では「カル(ら)うして大」とし、「ル」の文字がミセケチにより「ら」と訂正されていることを指摘する。しかし、この「ら」は異本との校合を傍記しているだけで、訂正をしているわけではない。

(紅葉賀)

- 一三 ことにふれてしるけるは(二四四三)ーしるければ(二二オ)
- 一四 心なけにいはいけてきこゆるは(二五三六)ーいわけて(二四オ)
- 一五 そうそくありさまいと花やかに(二五四二)ーさうそく(二六オ)

一三の大成本「しるけるは」は誤り、諸注釈書においては大島本の「しるければ」を採る。『評釈』では『源氏物語大成』『けるは』は誤植かとする。一四・一五ともに仮名遣いの誤りで、翻字する折、底本を離れてうっかり正しい歴史的用法に従ったのであろう。

(賢木)

- 一六 女かたも心あはたしく(三三四三)ーいと心あはたしく(二ウ)
- 一七 御手はいとおかしう(三五七八)ー御ては(三三オ)
- 一八 いとゆるらかにうちすしたるを(三六二六)ーいとゆるゝかに(三九オ)
- 一九 みすしあけさせ給いて(三六三三)ーみつし(四一

オ)

二〇 思給へらるゝこそ (三六七七) — 思給はらるゝ (四五ウ)

二一 春宮の御世を (三七〇〇) — 東宮 (五〇オ)

二二 またひらかぬみすしとも (三七二〇) — みつし (五二オ)

二三 うちそうときて (三七四五) — さうときて (五四オ)

大成における大島本の翻刻の方法は、訂正されたり補入されたりした本文を採用することにある。一六の大島本の「いと」はその補入の例だが、大成本では本文に取り入れていないし、校異にも指摘がないのは見落としたためか。諸注釈においても「いと」を入れて解釈していない。一七・一九・二一・二二・二三はいずれも用字や仮名遣いの誤りである。ただ、底本には「みづし」とありながら大成本では「みずし」とし、「さうときて」を「そうときて」と、現代仮名遣いにしてしまっている例もある。一八は「ゆるゝか」と明らかにオドリ字だが、大成本では「ら」と読む。『評釈』・小学館版では「ゆるらか」とし、新潮版は「ゆるるか」とする。

(須磨)

二四 いみしうおほへ給へは (三九五〇) — おほえ給へは (二オ)

二五 たいめなくてやとおほすは (四〇七七) — たいめなくやと (二七オ)

二四は大成本で「え」を「へ」とした誤り、また二五は大成本で「なくてや」と「て」を挿入した例。しかし、諸注釈書ではいずれも「て」を入れて解釈する。大島本とは異なるので、これは大成本に引かれた結果であろうか。

(澤標)

二六 すこしあはきかたによりぬるは (五〇三〇) — あわきかた (二九オ)

(蓬生)

二七 御そうそくなくと (五二八七) — さうそく (一四オ)

二八 むかへになむまゐりきたる (五二九二) — まいり (一五オ)

大成本では、二八のように歴史的仮名遣いに訂正（底本通りのはずなので、違いがあつてはならないのだが）する一方では、二七のように現代表記にするなど、混乱がみられるようである。

(絵合)

二九 御すしともひらかせ給て (五六二四) — 御つし (九オ)

(松風)

三〇 よろすにかなし (五八二二) — よろつに (六オ)

三一 契ことにおほせ給へは (五八五〇) — おほえ給へは (一〇ウ)

大成本では「つ」を「す」とし、「え」を「せ」と誤る。とくに、三一の「え」は、現代の「え」にほとんど近い字形で、

これを「せ」と読んだ事情は不明。諸注釈書ではいずれも「え」の本文とする。

(薄雲)

三二 さすかにたちいて、(六〇四三)―たちいてて(二

ウ)

三三 ありさまをもさゝ給へと(六〇五七)―き、給へと

(四ウ)

三四 ひくもいみしうおはへて(六〇七¹³)―おはえて

(八オ)

三二は大島本に「いてて」とあるのを、大成本で「いて、」とオドリ字にした例。三三は誤植のようで、校異では「き、」とする。

(朝顔)

三五 きこえいたし給へり(六四二六)―いたし給へる

(六オ)

三六 ひとことときこゆれば(六四九¹³)―ひとこと、

(一六ウ)

(少女)

三七 そうそくともものうちあはす(六七〇四)―さうそく

(七ウ)

三八 みにそへても(六七八四)―身にそへても(一七ウ)

三八は大島本の「身」を、仮名にひらいた例。大成本では、

原則として身体的な意味を持つ「身」はそのまま漢字を用いて

いるようだが、必ずしも確立してはいなかったようで、両用が各所に混在している。以下の巻にも見いだされるが、この例によって代表させる。

(玉鬘)

三九 にけいてにしをいかに思らんと(七二九¹⁰)―いかに

に思ふらんと(一一五ウ)

四〇 こゝにてしくはへなとするほとにひくれぬ(七三二

4)―日くれぬ(一九オ)

四一 みしまえにおふるみくりの(七四五⁸)―みしま江

に(三七オ)

三九は「ふ」の脱落、四〇は「日」を「ひ」とし、四一では「江」を「え」とする。「日」にしても「江」にしても、大成本ではもとの漢字を用いないで仮名にしているが、これが原則だったわけではない。三八のように混在の状態にある。

(野分)

四二 をむなへしのかさみなとやうの(八七〇¹⁰)―むみ

なへし(一一オ)

(若菜上)

四三 風にたゝよふ春のあは雪(一〇六五²)―あわ雪

(五二オ)

四四 いのちもえたふましかめる(一一〇九三⁶)―たふま

しかんめる(八八ウ)

四三は「あは」を「あわ」と誤って翻字する。四四の大島本

の「ん」は補入、大成本ではそれを採用していない。

(夕霧)

四五 ひとつにみたれてえむあるほとなれは(一三二七¹³)

―えむあるほとなれと(一二〇)

四六 おしみかほにもひこしろい給はねは(二三三¹³)

―ひこしろひ(三〇オ)

四七 おもたまへたゆみたりし程に(一三四一³)―おも

うたまへ(四一ウ)

四八 おもたまへらむけしきも(一三五二⁹)―おもうた

まへらむ(五六オ)

四九 わたりたまで少將の君を(一三五八¹³)―わたりた

まうて(六四オ)

五〇 よろつおもたまへわかれす(一三五九⁷)―おも

たまへわかれす(六四ウ)

五一 ひとつしかせたまで(一三六〇¹)―ひとつしかせ

たまうて(六五ウ)

五二 かくおもたまへなりぬるを(一三六一²)―かくお

もうたまへ(六七オ)

五三 なすらへたまてすてつるみと(一三六八⁶)―なす

らへたまうて(七六オ)

五四 おひいてたまける(一三七五¹¹)―おひいてたま

ける(八五ウ)

四五は大島本の「えむあるほとなれと」を、大成本では「な

れは」と誤る。ところが、大島本を底本としたと凡例に記す諸注釈書は、何の指摘もなくいずれも「なれば」で解釈する。このような例など、他本による校訂であれば、その旨を注記すべきであろう。四七以下は、大島本に朱で「ウ」と傍書するが、補入すべてを本文に採る大成本では一切無視する。大島本でウ音便を後筆で指摘するのは、後の宿木に一例見出すのと、この巻だけである。

(幻)

五五 もからきぬも(一四一五⁸)―裳からきぬぬ(一六

ウ)

(椎本)

五六 くらきあはせひとかさね(一五八一⁶)―くらきあ

わせ(四六オ)

(総角)

五七 さやうなるためしなくやは(一五九〇⁴)―きやう

なる(五オ)

(宿木)

五八 さやなる御けはひにはあらぬ(一七二三¹³)―さや

うなる(三一ウ)

五九 あいなく心つかいいたくせられて(一七三七⁶)―

心つかひ(四七ウ)

六〇 花やかにおほしをこりて(一七七¹)―おほしお

こりて(九五オ)

六一 いときよらにそあるやとほめいたり（一七八四八）

ーほめるたり（一一二ウ）

五八は、大島本に「さやなる」に「ウ」と傍記するものの、大成本では底本に取り上げず、校異に「さやウなる大」と指摘するにとどまる。以下は、他の巻にも見られた「ひ」を「い」、「お」を「を」、「ゐ」を「い」とし誤って翻字している例である。

（東屋）

六二 いとらうたけにゐ給へるに（一八〇五九）ーいとら

うたけにおかしけにてゐ給へるに（一七七オ）

六三 北おもいにいたり（一八〇八一）ーゐたり（二〇ウ）

六四 かの中ひとにはかられて（一八〇八八）ーかの中人

に（二一オ）

六五 ちいさきいゑまうけたりけり（一八三五八）ーちひ

さきいゑ（五五ウ）

六六 はやりかならましはしもかたしろ（一八五一二）ー

はやりかならましはしも（ミセケチにし、「かはイ」と傍記）かたしろ（七五ウ）

六二は、大成本では底本に記されている「おかしけにて」の語を脱落している。そのため河内本・別本の校異で「らうたけにーらうたけにをかしけにて河」「らうたけにーらうたけにをかしけにて御宮保図国」とするのは不必要となる。『評釈』では、これまでもそうだが大成本を継承した上で、「いとらうた

げにてゐたまへるに」の本文とし、「て 底本なし。諸本による。河内本など『をかしげにて』と記す。ここで記す「底本」とはすでに述べたように大島本ではあり得なく、大成本を指しているようである。すると、筆者は大島本を直接見て本文を定めたのではなく、誤脱した大成本の本文によったと考えられ、さらにそれに手を加えるという新たな異文を作り出しているといえる。小学館版は「をかしげにて」を補い、頭注でこの語句を持たない本が多いと指摘し、新潮社版では「いとらうたけにてゐるたまへるに」と、『評釈』と同じ本文とする。東屋巻は明融筆ではないが、つれの写本では大島本と同じく「おかしげにて」の語句を持つ。

六六は、大島本では「はしも」をミセケチにしているものの、大成本ではそれを無視して本文化する。大島本は、「はやりかならまし」で切る本文にしたはずで、異文として墨筆によって「かは」と傍記したのである。『評釈』では「はやりかならましかばしも」とし、「ならましかば 底本『ならましは』。青表紙諸本による。河内本も同じ。たまた別本は異同が多いが、『か』のない本が多い」とし、小学館版・新潮社版もこれを継承する。

（蜻蛉）

六七 いみののこりもすくなくなりぬ（一九五二三）ーい

みの、こりも（二七ウ）

六八 われを、ろかなりと思て（一九五三三）ーわれを、

ろかに思て(二九オ)

六八は、大島本では「、(を)」ろかに」とあるのを、どういうわけか大成本では「、(を)」ろかなり」とと語句を補っている。別本の校異でも「、(ヲ)」ろかなりとーをろかなると宮国一おろかなりと保」などとするので、底本に「なり」とあったとの判断である。しかし、大島本にはこのような語句はどこにも見いだすことはできなく、大成本の明らかな誤りと言わざるを得ない。『評釈』では、大成本を用いて「われをおろかなり、と思ひて」とし、大島本とは異なる。新潮社版も「おろかなり」とを継承し、小学館版は「おろかに」とする。ただ、明融本のつれの写本では「おろかなり」とある。

これまで示したのが、大成本における大島本との違いだが、膨大な量のうちのわずかにこれだけの誤りなので、ほぼ忠実な翻刻文として利用することができるだろう。しかし、それでもやはり見過ごすことのできない翻刻の違いもあり、それが後の注釈に影響を与えているのではないかと思われる点もある。それと、すでに指摘したように、「日」「江」「身」「裳」など、漢字で表記されているにもかかわらず、大成本ではこれを仮名に直して翻字しているのはどのような事情なのか、たんなる音を借りた文字ではないだけに理解できない。これは「見」についても言えることで、この場合は原則としてすべて「み」と仮名にしたようである。「見たてまつりてまじと」(桐壺)とか「見ざらましかば」(同)などでも、「み」とする。しかし、

視覚的な意義がある変体仮名の「見」は、やはり元の字体を尊重して翻字すべきであろう。かといって、「見」は「み」と徹しているわけでもなく、時に「見しり給らむと」(葵)などもあるのは、むしろ誤りなのであるうか。これは底本の「身」も同じで、身体的な意味であっても「み」と「身」の両様に翻字される。

三 初音巻の性格

これは別の機会にまとめたく思うが、大島本のミセケチ・補入とかの扱いについて、大成本では朱筆・墨筆のいずれも訂正された本文を底本として採用する。この書き入れは、雅康自身とした例もあるだろうし、初めにも述べたように正頼の筆もあるはずで、その本文を用いたために、大成本の本文が他の青表紙本からは離れてしまった現象も時には起こっている。とはいふものの、訂正以前の本文は明らかに誤写もあり、どの時点を正当と認めるのは困難なことである。その訂正本文に関して問題のあるのは初音巻で、これは大島本の中では別本として大成本には採用されなかった。この初音巻の本文が、大成本では他の巻とかなり異なった扱われ方をしているのである。

一 御方ノの御まへのありさまともまねひたてんも

(七六三五・一オ)

この本文について、大島本では右に引いたように「御まへの」

「とも」の語句を持ち、これは別本特有の表現のようである。この限りにおいて、確かに大島本は別本の本文を継承していると判断できる。ただこれには、傍線を付した部分の文字が、ミセケチなどではなく真中から墨によって線が引かれ、削除されているのである。その指定通りに除いて読むと青表紙本と一致してき、別本とは言えなくなる。雅康が依拠した本文は別本であつたにしても、校合して訂正した本文は明らかに青表紙本になつてゐるのだから、そのような扱いにすべきなのではないだろうか。

これまでも述べたように、初音巻以外の巻々では、もとの本文が河内本や別本であつたにしても、朱や墨によつて訂正したり補入した本文を大成本の底本とし、青表紙の校異の部分ではその旨を指摘していた。いわば大成本の底本の定め方の原則は、本文の書写者である雅康の所為か後人の所為かは問わず、ともかく新たに書き入れられた本文を採用することであつた。そのため、大成本の底本は他の青表紙諸本と多く共通する本文となつたわけだが、しかし一方では本来の大島本そのものからは距離を持つようになつたのである。その大成本の方針は、現実的な処理として妥当であるし、誤写の訂正もかなり多いのを無視してまで初めに写した本文を再現すべきだとは思わない。しかし、その一貫していたはずの方針がこの初音巻ではまったく適用されず、補訂以前の本文を尊重するという態度に変更されてゐるのである。それは別本であるため、底本には採用しな

かつたことと関係するのだろうか、やや無原則な感じがしないではない。

大成本では、初めに「本巻ノ大島本（飛鳥井雅康筆）ハ青表紙本デハナク別本デアルカラ、之ヲ底本トセズ、池田本ヲ底本トシタ」とし、別本である初音巻は底本にできなかった旨を述べる。本来ならば訂正された本文を底本とし、他の巻と同じようにどの語句が消されたり加えられてゐるのか校異で指摘すべきであろうが、当初から全体が別本と分かつてゐるからには、それまでの方針とは異なつても仕方がなかったとは言えるだろう。このようにして、大島本の初音巻は底本の地位から別本校異の一隅へ押しやられたのだが、しかしその校異の欄においても、大島本に訂正のあることは一切触れられず、訂正される以前の本文が青表紙本とどのように違つてゐるかが指摘されるだけである。このような次第で、ここでは初音巻の書き入れと大成本で漏らした語句等について、それは後人が校合に用いた本文の性格ともかかわるのだが、以下指摘しておきたい。

- 二 さうすぐ有さまよりはしめて（七六三九・一ウ）
- 三 めやすく（補入）もてつけてこゝかしこにむれるつゝ（七六三九・一ウ）
- 四 いはひ事かな（補入）みなをのゝ思ふ事の（七六三九・二オ）
- 五 わらひ給へる御あり（補入）さまを（補入）年のはしめの（七六四一・二オ）

- 六 かゝみの影にもかたらひはんへりつれ(七六四・二・二オ)
- 七 契はかりきこえ(補入)かはし給ふ(七六五・四ウ)
- 八 火おけにしゝうを(補入)くゆらかして(七六七・六ウ)
- 九 さうかちなどに(補入)もさえ(ミセケチにして「れ」と傍書)めやすく(七六八・一・六ウ)
- 一〇 あはれな(補入)るふることゝも(七六八・三・七オ)
- 一一 こゑまちで(ミセケチにして「出」と傍書)たるなと(七六八・五・七オ)
- 一二 かうしもあるましき夜ふかさそかしと(七六八・三・七ウ)
- 一三 はたなさ(ミセケチにして「ま」と傍書)けやけしと(七六八・一四・七ウ)
- 一四 今日はりひ(ミセケチにして「む」と傍書)しかくの事に(七六九・四・八オ)
- 一五 おもふ心なとの(ミセケチ)物し給ひて(七六九・一〇・八ウ)
- 一六 かうのゝしる車のをとも(七七〇・二・九オ)
- 一七 物へたてで(補入)きゝ給ふ御方々は(七七〇・二・九オ)
- 一八 日かす(ミセケチにして「ころ」と傍書)すくして

- 一九 わたり給へり(七七〇・九・九ウ)
- 二〇 かさねのうちき(ミセケチにして「きぬ」と傍書)なとは(七七・一・一〇ウ)
- 二〇 御そと(補入)もの事(補入)など(七七・一・一〇ウ)
- 二一 さる(補入)へきおりゝはうち忘れ(七七二・二・一ウ)
- 二二 綯(補入)仏の御かさはなくしたる(七七二・一・二オ)
- 二三 さすかにかはかりの御(補入)むつひは(七七三・二・二ウ)
- 二四 思給へしられ侍(補入)けるときこゆ(七七三・四・二ウ)
- 二五 一本(ミセケチ)おもふと(補入)たのむと(ミセケチ)のたまふ(七七三・六・一三ウ)
- 二六 さまゝゝあ(補入)まねくなつかしく(七七四・三・一四オ)
- 二七 かねて御せうそこともありければ(七七四・九・一四ウ)
- 二八 ゑにも(補入)かきとゝかたからむこそ(七七五・六・一五オ)
- 二九 霞のなか(ミセケチにして「うち」と傍書)と見へわたさる(七七五・八・一五ウ)

三〇 さるはかうこむ(ミセケチ)しのよはなれ(七七五
九・一五ウ)

三一 一本かうさしのいともよはなれ(ミセケチ)たるさ
ま(七七五九・一五ウ)

三二 御方ノえ(ミセケチ)かへりわたり(補入)給ひ
ぬ(補入)はす(ミセケチ)(七七五₁₂・一六オ)

以上が、大成本には指摘されていない大島本初音巻の訂正箇所、大半の書き入れは底本の別本を青表紙本によって校合した結果である。青表紙本との違いをすべてチェックしていったにしては、まだ多く残されているが、これは用いた本文の性格もあつたであらうし、校訂者の見落としも予想される。

さて、大成本では後補の書き入れは一切採用することなく、削除したり補入する以前の大島本の本文と、底本とした池田本との違いだけを校異に指摘していった。しかし、それもゆれがあるようで、校異漏れを見いだすことができる。四では、「かな」を補入する以前の大島本は「いはひ事ともみな云々」とあつたはずだが、校異では指摘がなく、むしろ「とも一ナナシ」と、存在する語句を「ナシ」とする。これは原則からはずれていゝのではなく、単純な見誤りであらうか。

音便やささいな違いを無視した例として、二の「さうすく」は「さうそく」と同一と見なしているようであるし、六は青表紙本と同じ「はんへりつれ」とあるにもかかわらず、校異では「侍れ別」としかない。一二の「かうしも」は「かくしも」、

一六の「かう」は「かく」、二七の「御せうそこ」は「御せうそく」と同じ語句として処理される。

これ以外は、三のように「めやすく」が補入されていても、校異では「めやすくナシ大保」といったように、あくまでも訂正以前の本文を基準とする。これまでも述べたように、他の巻の処理と方針がなぜか異なっているのである。そうかと思うと、一七をとりあげると、ここでは「て」が補入されているためもとの本文は「物へたてき、給ふ」とあつたはずだが、校異では指摘がなく、本来から「物へたてき、給ふ」とあつたことになっているなど、杜撰な面も見られる。校訂に用いた本文は、多くは池田本と一致して特定できないが、二〇の「御そものなと」は底本などと共通しながら、わざわざ「御そもの事など」と書き入れており、この本文は肖柏本と重なる。正頼前後の流布本が用いられたようで、これは他の巻についても調査を進めていけば、ある程度の系統が判明するかも知れない。そうなってくると、校訂された本文を純正な青表紙本として利用するのは問題だが、これらについては煩雑になるので別の機会に考察したい。

付記―本稿は、昭和六十二年度文部省科学研究費一般Cによる成果の一部である。なお、調査にあたっては藤本孝一氏のお世話になったことを記し、ここに深謝申し上る次第である。

web公開に際し、画像は省略しました